
デザートはいかが？

中宮寺 滯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デザートはいかが？

【Nコード】

N7420Q

【作者名】

中宮寺 滯

【あらすじ】

御題に沿って【氷の願望】【M?dchen Lippen】
人形師の夢語り】【宝石箱の外】【四十五階の青い異世界】の登場
人物たちの別物語を紡いでいきます。連載途中のものは物語のヒン
トになるかもしれません。

君は薔薇に生き血を捧げた（前書き）

【氷の願望】の瑠音と天泉の昔話

君は薔薇に生き血を捧げた

「ナイチンゲールって知ってる？」

瑠音は丁寧タルトを小さく切り分けながら唐突にそう切り出した。相変わらず大広間で行われる独りだけの晩餐の給仕をしながら、天泉は静かに微笑んだ。

「愚かな男のために身を焦がした、哀れな小動物のお話ですか」

濃い目のアールグレイを真っ白なカップに注ぐ彼の指先を見つめながら、瑠音はそうよ、とつまらなそうに言う。薄暗い広間に生える純白のカップに広がる色はよい香りを放ち、真っ赤に熟れた苺のタルトとよく合いそうだ。銀のフォークで苺を突き刺すと、少女は小さな足をふらふらと遊ばせながら歌うように呟く。

「女に弄ばれた男のくだらない願いを真摯に受け止めたかわいそうな小鳥。自らの命を顧みず、ただ憧れだけの“恋人”という幻想に踊らされてこの世でもっとも美しい花を生み出した存在。」

ぐちゅり。

赤い果実をその白い歯ですり潰しながら、瑠音は悲しげに瞳を閉じる。

「この物語の顛末は、何を暗示しているのでしょね」

紡ぎだす言葉に含まれるのは、僅かな自嘲。

「幻想のためだけに命を放りだし、その事実を知られないまま朽ちるなんて、人間の愚かしさを絵に描いたような物語だわ」

愛の唄を歌い続けたナイチンゲールは薔薇に生き血を捧げる。その真っ赤な薔薇を手にして求婚した男は、宝石と薔薇を比べられ、あしらわれて終わる。哀れな小鳥の亡骸に気づくことなく、偶然だと軽い気持ちで男はそのまま行き続ける。愛という幻想に惑わされ、そして何も知らずに朽ちたナイチンゲールは、果たして幸せだったのか。この物語がつらく悲しい色を纏っているのは何故なのか。瑠

音は思案する。

——ああ、同じだ。

天泉は困ったように嗤う。恐怖という幻想に惑わされ、すべてを見失った少女と。少女という圧倒的な存在に踊らされ、こうして終わりに向かつて進んでいく自分。ナイチンゲールのように美しく儚い命が、少女によって握られている。

「お嬢様。無垢で純粋な小鳥にご自身を重ねているのならはおやめになったほうがよろしいかと。お嬢様は小鳥のように知識を持たぬ存在ではありません」

溜音は反応せず、ただカスタードクリームとタルトを口にした。

「ナイチンゲールの物語が幻想的で物悲しいのは、俺たちのようにその物語を観察する存在がいるからです。ナイチンゲールは命を使い果たして男につくし、愛を信じた。男は女に踊らされながらも、庭に＜偶然＞あった赤い薔薇に一時の幸福を得る。尊い犠牲によるものだと思わずです。ならばこの物語はそこで完結してしまっている。彼らは一様に不安など感じぬまま、哀れまれる要素に疑問を感じることでしょ」

饒舌な天泉に溜音はくすりと笑うと、濃い紅茶に口をつける。深い芳香が体に染み渡り、タルトの甘さが脳を犯していく。満たされた笑みを浮かべ、少女は深く座り直した。

「人は悲しい生き物だわ」

掠れた声でそう呟くと、そっと瞳を閉じる。天泉はあやす様に少女の髪を梳きながら、月夜に歌う小鳥に思いを馳せる。

「ねえ、天泉」

心臓に棘を突き刺し愛の唄を歌い続ける苦しみは、何も紡がずに微笑むことよりもつらいのだろうか。

「私は、間違っているのかしら」

すべてを了解した上で、男が己に気づくことなく、女がどうしようもない愚か者だと知っていたなら、ナイチンゲールは歌うことをやめただろうか。

「お嬢様、貴女に間違いなどあるはずがありません」

そういつて優しく微笑む青年の瞳は深く暖かい光を湛えている。
少女は安心したように微笑み、ゆっくりと瞳を閉じた。

きっと、すべてが終わったとき。少女は後悔し、泣き、そして彼岸へとたどり着くのだろう。彼女がそうなるのは、彼女がすべてを知った上でどうにもならないことを承知しているから。それはナイチンゲールの物語を観察する自分たちのようなもの。少女は観察者でありながら、物語の作者でもある。だからこそ、己の過ちが取り返しのつかないことだと後で気づくのだ。

「その過ちに加担している：俺はいつたい、なんなのだろうか」

青年はまどろみながら思案する。小鳥がどうするかはわからないが、それでも、すべてを知ったとしても、きっと自分は薔薇に生き血を捧げるのだろうと確信している。少女の願いのためならば。少女との世界を護るためならば。

歪んでいてもいい。間違っているといわれてもいい。それでも、絶対に他人には咲かせられない深く赤黒い薔薇を生み出すのは自分しかないのだと信じたかった。愛情などという言葉では言い表せない、何かが壊れてしまっているような感情。それに突き動かされながら、そして青年は静かに眠りについた。

君は薔薇に生き血を捧げ、そして物語を終焉へと導く。

【氷の願望】 s i

d e s t o r y.

赤い果実に懺悔する（前書き）

“M?dchen Lippen”のシャルロッテ姫とランフォー
ドのお話です。

赤い果実に懺悔する

「Spiegelin, Spiegelin and der Wand, wer ist die Schenstee im ganzen Land?」

真つ赤な林檎をかじりながら、我儘なお姫様は金で装飾された小さな鏡にそう問うた。うっとり果実を咀嚼しながら、その瞳は窓の外に向けられている。高めの塔に配置された姫の部屋からは、城下がほんの少しだけ見えた。彼女の視線はくると一周すると、そして青年の目の前で止まった。ぽいっと新しいリングを銀の盆から青年に投げる。片手でキャッチすると、青年は深いため息をついて、その林檎を口にした。

「めずらしいですね、童話をお読みになられるなんて」

青年——ランフォード・ウィルヘルムは、シャルロッテ姫の向かいの椅子に腰をおろした。休憩時間なのか、訓練は休みなのか：昼間にこうして訪れることは久々のことだ。姫は相変わらず、大きな椅子にちょこんと座って楽しそうに鏡を見ている。その表情は少女らしく、珍しく：可憐だった。このままでは調子が狂ってしまう。そう思ったランフォードは、あえてつまらなそうに林檎にかじりつく。

「無粋な男ですこと。わたしだってたまには童話くらい読むわよ。それより…」

憎まれ口をたたきながら、シャルロッテはじ、とランフォードを見つめた。海色の瞳に気おされまいと、ランフォードもじっと見返す。そして、ふといつもと違うことに気付いた。

「髪、切りましたね」

ぼろりとこぼれた言葉を聞くと、シャルロッテは一瞬驚き、そして唐突に赤面した。どうやら予想外だったようだ。

「信じられないわ：気づくはずないと思ってた：」

ランフォードは心外だとも言うようにそっぽを向くと、ちいさくつぶやく。

「どれだけ時間を共有してきたと思っているんですか」

シャルロッテ姫は母に似た美しい金の髪をもっていた。軽くウェーブした毛先は腰に届くほど豊かで、普段は気分によって髪型を変えている。というのも、自室を出るには仮面をしなければいけないというつまらない掟のせいで、彼女はほぼ自室に引きこもっているのだった。父は病で少しおかしいし、兄もだんだん近づかなくなり、さらに父の代わりに職務をこなす母を訪ねることなどできない。だからこそ、食事・入浴・睡眠がすべて行える彼女の自室は書架から持ち込んだ大量の蔵書と、召使のレティシアが運ぶ菓子類・お茶類ですっかり埋め尽くされていた。シャルロッテは一日の大半を窓に面した大きな二脚の椅子の片方に座って過ごし、たまに現れるランフォードとおしゃべりをしたり、レティシアとチェスをしたりしてすごしていた。

そんな彼女が髪を切ったというのは、日常の中では割と大きな変化だったりするのだ。

「前髪が少し伸びてきたし、ちょっと雰囲気変えようと思って。とはいっても、そんなに切ったわけじゃないけれど」

そう言いながらも楽しそうに毛先を触りながら鏡を見ている。まるつきり、普通の少女がそこにいた。

「それで、鏡を見ていたら有名な童話を思い出したわけですね」

よく見ると、机の上にはありとあらゆる林檎を使った菓子が溢れている。先ほど出された紅茶もどこか林檎風味だ。

「それもあるけど、どういうわけかたくさん林檎が入ってきたのよ。研究所が林檎の上手な栽培方法を確立したみたいね。これでも

う少し安い値段で流通できるわ」

それは——ランフォードの仕業だ。

よく国外にふらりと旅に行ってしまう彼は、さまざまな国から文化を輸入していた。合法的なものではなく、あくまで旅先の親切なひとにもらったものでしかなかったのだが：騎士団に所属する身であれば、それも立派な研究対象になってしまう。彼はこっそり研究所に入りびたり、今回も林檎の栽培方法を伝えてきたのだった。

そうとは知らず、この国も発展したものね——そうつぶやくシャルロッテは、くすりと小さな笑みをこぼした。

「それはそうと、どうして、継母は白雪姫に嫉妬したのかしらね」
聡明な姫は、時にわけのわからないことを言う。

「それは：白雪姫が美しかったからでしょうに」
相変わらずめんどくさそうにそう言いながら、アップルパイに口をつける。香ばしさに自然と頬が緩むと、シャルロッテは呆れたように笑った。

「美しくって、うらやましくて、鏡に訪ねたの？それって悲しいだけじゃない」

「そんなの知りませんよ」

「だってほら、ちよっと鏡をみて頂戴」

そして、卓上型の鏡がランフォードの方を向く。そこには、ひどく疲れた顔があった。灰色の瞳は少しだけ輝きが少ない。

「何が見える？」

「疲れた顔の男が見えますね」

「それが貴方よ。でも継母には継母自身が見えていたはず。自分の顔を目の当たりにして、世界で一番美しいのは誰？なんて、悲しいだけだわ」

——それは童話の話ですよ——そう言おうとして、ランフォードは口をつぐんだ。シャルロッテの表情が、ひどく艶やかで、残酷さを孕んでいたからだ。

「美しいって罪よね」

小さな唇が、赤い果実を飲み込んでいく。

「白雪姫が美しかったから、命を狙われて。でも美しかったからこそ、王子様と結婚して。でもそれって、結局美しさは彼女のパーツのひとつでしかなかったってことでしょ」

饒舌になった姫をとめることなど、誰にもできはしない。

「自分が美しいってことに気づかない女なんていないと思うの。白雪姫だって、ほんとには気づいていたんじゃないかしら：お馬鹿さんだったかもしれないけど、どう？　もし、小屋にやってきた老女が、継母なのだと気付いていたなら」

ぞくりと、背筋が寒くなった。

「きつこう思ったはずだわ。“ああ神様！　この果実を口にしたら、私の罪は消えるのでしょうか！　哀れな夢をみた母を救うことができるのでしょうか！”」

林檎は、知恵の実ともいわれる。甘酸っぱい果肉と、魅惑的なその色彩。赤と白のコントラストは、どこことなく人間的である。そんな林檎に毒がはいっている可能性を知ってなお、童話の姫君がその罪を甘んじて受けたのだとしたら――

「だから、食べたの」

ランフォードは、はっと我に返る。ふと視線を戻すと、悪戯っぽく笑うシャルロットの姿。

「罪を飲み込んで、忘れようとした。そうしたら、物語としては最高に面白いと思わない？」

くすくすと笑いながら、姫は林檎のコンポートを口にしたら。甘酸っぱい香りは、どこか妖しげな魅力で満ちている。

「だとしたら、俺も飲み込みますよ」

そしてランフォードは口元に怪しい笑みを浮かべて、先ほどよりも輝きの増したその灰色の瞳でシャルロットのそれを射抜く。

「貴方からもらったこの林檎に込められた意味。それを懺悔と共に飲み込みましょう。少年になりたかった可憐な少女の――ね」

そうして、優しく笑って。

彼女のフォークに残ったままのコンポートを、無理やり口に運んだ。甘さと酸っぱさ、そして少しだけ苦いそれは、少女のささやかな願いが込められている。

「あら、バレてたのね」

困ったように笑いながら、そして姫君は窓の外を見る。広がる城下町の上を、ひらりと鳥たちが踊っていった。

「髪を短くして少年になれば、俺のように自由に国外に出られると……少しでもそう思ったのか」

姫の部屋から出て、ランフォードはぼんやりと思案する。

「けれど結局できなかった。彼女もまた、この国に縛られた被害者か」

あと少し、あと少しで。

「姫を、楽にできる」

だからそれまでは、

「どうか、懺悔はしないで」

秘めやかな願いは、林檎のように真っ赤な夕焼けに消えた。

—— M ? d c h e n L i p p e n / シャルロツテ姫とランフォード
番外編

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7420q/>

デザートはいかが？

2011年3月26日23時25分発行